

Q5 ひらがなや漢字を正確に書くことが苦手な子どもには、どう対応したらよいでしょうか

子どもの状態

視写はできるが、聴写になると極端に嫌がる。

似ている文字を間違えて書く。「な」「た」鏡文字になる。「し」「じ」

止めやはね等の細かな部分をよく間違える。

視写に時間が掛かり、文字が抜けることがある。

小さな字が書きにくかったり、枠の大きさに合わせられずはみ出したりする。

状態の理解のポイント

- 文字の形を完全に記憶していないために再生できない。
- 似ている漢字や平仮名の視覚的な弁別が完全ではない。
- 空間認知の能力が育っていない。
- 注意の集中や持続が難しい。
- 目と手の協応動作がうまくなされない。

考えられる対応

「あ」という字は「十」と「の」でできているというように、へんやつくりの組合せで、文字の形の認識・記憶をしやすいとする。(図88)

いろいろな図形や文字の中から、提示されたものと同じものを選択する課題を通して、細部に注意を傾けられるようにする。

止めやはねなどは、教師が言葉で表現し、子どもも言いながら書くようにする。(図89)

ペグ差し(ボードに空けた穴に棒を差して数や形の学習に用いる教具)などを用いて、モデル図形を注視し、空間関係に注意しながら形を構成することに慣れるようにする。

具体物の縁取りや枠の中の線引きなどにより、線や形、コースをはみ出さないことを意識できるようにする。

一文字分のマス目を大きくしたり、マスの中心に線を引きいたりして、書く位置を意識しやすいようにする。(図90)

手本のプリントを個々の手元に配付するなどして、どこに、何を、どれだけ書けばよいのかが即座に分かるように工夫して課題提示する。

家庭でも書くことへの抵抗感・劣等感をなくすために、パソコンやワープロなどを積極的に活用するようにする。



図88 文字の組合せ



図89 音声を伴った書字

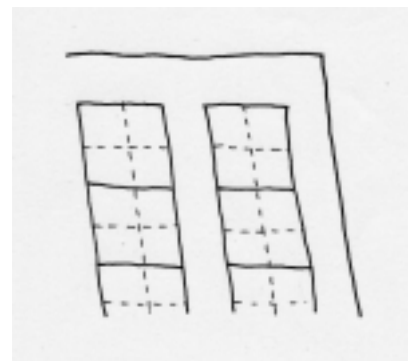


図90 マスの大きさや補助線の工夫